

「化合物が見せる最も美しい一瞬(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

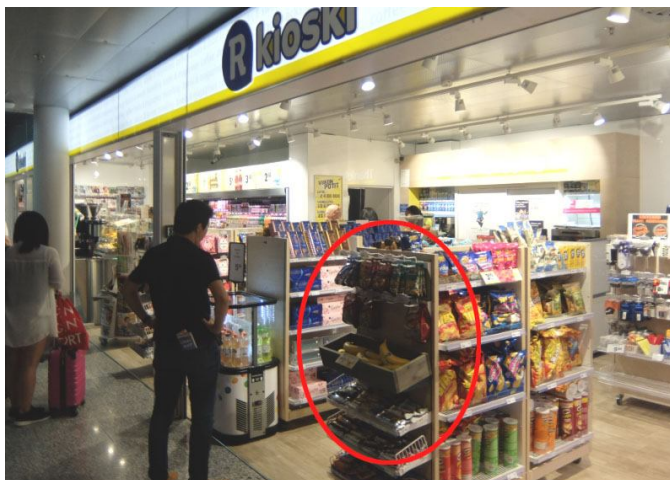
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

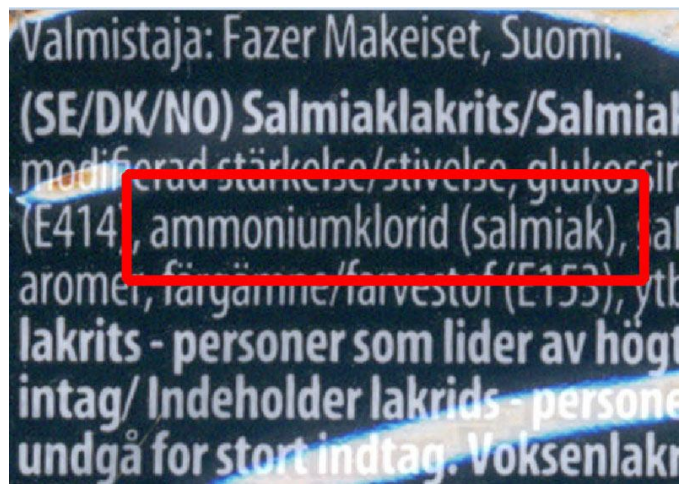
小学校の理科の授業で、塩化アンモニウムが使われることはまずないだろう。日本では、この化合物があまり一般的ではないからだ。しかし、北欧では事情が異なる。「極めて身近な」化合物なのだ。



それがこの「サルミアッキ」というお菓子だ。フィンランドやスウェーデンでは、スーパーやコンビニで普通に売っている。飴タイプが多いが、グミやガムも見たことがある。私も、現地の友人に「必ず」おみやげにもらうのだが、「あとで食べます」と言って、実際は食べない。まずすぎるのだ。よく「世界一まずい飴」として話題になるが、現地の人はおいしそうに口に入れているが、私には何とも形容しようのない味だ。



写真はヘルシンキ(ヴァンター)国際空港のキオスクだ。フィンランドは物価が高い。コーラのペットボトル1本が4ユーロ(約500円)もする。○が「サルミアッキコーナー」店の一番良い位置を陣取っている。



袋の裏側には、多国語で原材料が書かれている。スウェーデン語の欄には「ammoniumklorid (salmiak)」と書いてある。つまり、材料の一つが「塩化アンモニウム」なのだ。「サルミアッキ」という語そのものが「塩化アンモニウム」という意味だということもわかる。こんな薬品を食品の材料にすることが、まず驚きだが、同時に「塩化アンモニウムは食べても安全」という事実も、北欧人が証明している。



実際の塩化アンモニウムを試薬ビンから出してみると、平凡な白い結晶だ。



拡大してみると、石英のように見える。特に「美しい結晶」とも言えない。しかしそうとも言えないのだ。